釣れ釣れなるままに

２００８年思い出の釣行記 PART.　２

ワスれられないワスリ

鹿島釣狂

☆釣 行 日　　平成２０年５月５日

☆入釣場所　　阿寒湖畔

サクラを愛でる

　海、川、湖のどんな釣りにも対応できるようにと釣り道具一式を積んで、帯広の息子の慰問にいった。息子は釣りを趣味としているわけではないが、父親と共に過ごすのは釣りが一番と考えてくれているようだ。息子宅に着くと、すぐにインターネットを開いてどこに向かうかを吟味している。阿寒湖畔のホテルを検索してみたが、意中のホテルはゴールデンウィークのど真ん中とあって全室満杯ということでなかなか見つからない。そうこう

しているうちに宿泊費の高い方にキャンセルが出たということで、予約してから出発した。道すがら、道東の景色をバックに満開の桜が出迎えてくれた。運転は息子に任せているので車窓からの花見酒と洒落込んだ。

ホテルで１泊し、早朝、釣りの出来る湖岸を探して車を走らせた。まもなく数台の車が湖畔に駐めてあり、小川の清流が注ぎ込む湾洞に釣り人を発見した。昨日は６０㎝台のニジマスが上がったということで、息子はハンドルからルアー竿に、私はコップ酒からフライ竿に持ち替えて竿を振った。ルアーマンやフライマンが入れ替わり立ち替わりやってくるが、ため息をついては去っていく。私の竿にも変化は起こらず、退屈なときが過ぎていく。景色でも撮ろうかとデジカメをとりに戻った車の脇の細流に魚影を発見した。小さなフライを振り込んでみるとすぐにその魚影がフライをひったくり水面に銀鱗が踊った。ヤマメだ。コロッとした幼児体型に艶めかしいパーマークを浮かべ、小さいながらも渓流の女王にふさわしい品格をしている。その瞳が汚らわしい手で私を触らないでと訴えているようで、その冷たい流れの中でそっと手を開いた。

私の隣の釣り人が魚を掛けた。近づいてみるとサクラマスである。魚を傷つけないようにと湖面から上げずにフックをはずしてリリースしたが、その銀鱗が瞼に焼き付いている。この連休はサクラの花びらとサクラマスの銀鱗を堪能して帰宅した。

阿寒湖のサクラマスの銀鱗を堪能

岩見沢釣遊会第２回大会

☆開 催 日	平成２０年５月１１日			
☆開催場所	旧大阪ドライブイン～栄浜港			
☆入釣場所	大成町ワスリ			
☆釣　　果	ソイ	４２０	㎜	１
	ホッケ	３５２	㎜	１
	カジカ	３３０	㎜	２
	クロガシラ	３２０	㎜	１
	重量	３５４	０ｇ	
	合計点数	１１２６	点（２魚種身長＋５匹重量）	
☆成　　績		３	位	

ワスリ

本日は交編会との合同大会である。会員レベルの交流から発展し、昨年度は２回、そして今年度は味を占めて４回の合同大会開催の運びとなったのだ。財政状況の解決のためだけでなく、お互いの釣技や運営方法などを学び合い共に発展していくことが出来ればと願っている。今回は岩見沢釣遊会が主催する形で、２魚種身長＋５尾重量で争われる。午後７時３０分、交編会員を乗せた札幌からのバスに釣遊会会員も乗り込み、バスの中はいつにもまして華やいでいる。旧知の仲のように楽しく釣り談義に花を咲かせることが出来るのも釣り仲間という気安さからだろう。

本日は、久々に北海道に寒気団が入り込み朝方は冷え込むだろうと予報している。風はなく波もほとんど立たないらしい。釣り場は床丹か軽臼かと迷っていたが、佐々木氏、吉井氏がワスリに向かい、さらに交編会員２名も続くという。ワスリには過去に４回の経験があり、ボンズや優勝などと浮き沈みの激しい所だが、今日のような凪では、魅力的なところに思える。

大平川側から５人でワスリに向かった。床丹側からの距離と同じ様なものだが、床丹側のゴロタ浜に比べると、平盤状なので大変歩きやすかった。反面、似たような出岬が続き、目指す釣り場が分かりにくい。経験豊富な佐々木氏でさえ、躊躇して足が止まっている。私は床丹側からの入釣経験しかなかったのだが、一旦足が止まった佐々木氏に荷物を預けて空身で探しに行くと見覚えのある出岬が並んでいた。バスの到着が早かったのだろうか、釣り人は誰もいない。佐々木氏は、私に釣り場の占有権を譲ってくれた。私が右、佐々木氏が左の出岬で荷を下ろした。そして準備している間にも釣り人のキャップライトが続々と近づいてきて、私たちの周辺に展開した。帰りのバス待ち時には大平川駐車帯にあった大型バスが既に出発した後だったが、大会参加者の釣り人が１４名もバス待ちしていた。本日のワスリは床丹側からの入釣者や個人釣行の人たちも入り乱れて、釣り銀座状態だったのだ。

釣り場から狩場山の勇姿を望む。あちこちに店開きをしていてお恥ずかしい。

海中の竿の先には

北海道上空に寒気団が侵入して、峠では雪が降るような天気になった。海もノッタリと欠伸をしているような静けさだ。海水温の急激な低下と共にこの凪では魚の活性が下がっていると思われる。ともかく早く勝負に出たい一心で、投げ竿３本共にイカゴロ、バクダンを付けて磯際に近投を繰り返す。しかし、アタリは一向に出ない。１時間も過ぎた頃ようやく竿先にチョンチョンとした小さなアタリが出てガヤが釣れた。しかし、それは３０cmほどもある大きなものだった。これを切っ掛けにソイやハチガラ、ガヤがポツンポツンと続いたが大物は来ない。

初アタリの主は３０㎝に届きそうなガヤだった

手持ち無沙汰な感じがして磯竿を用意してウキを通す。そして、念のために投げ竿の竿先には鈴を付けておく。シャーベット状のゴロを出来るだけ遠投し、静かに引いてくる。しかし、何の反応もない。しばらくそれを続けていると、投げ竿の鈴がチリンチリンと鳴った。竿がくい込まないので放っておいて引き釣りを続ける。しかし、思い出したようにチリンチリンと鳴る。ゴロ引きは諦めて、ホッケでもとサンマを付けて磯竿を岩棚に放置する。チリンチリンと鳴っていた投げ竿を上げてみると、ソイ、ハチガラ、ガヤのトリプルだった。どの魚かは分からないが先に掛かった魚がエサを踊らせて、他の魚を道連れにしたのだろう。

アタリが少なく寒さも増し、シャーベット状のゴロを掴んだ指先が痺れるようになってきたので、体を温めるために佐々木氏の所に偵察に行く。海水を張ったバッカンに中型カジカが入っていたが、その１匹だけだという。私は、数は釣ったが大物はいないと報告した。すると、「おまえの釣っている場所から４ｍ後に下がって、竿先が届くくらいの所に、すり鉢状になった穴がある。その周りは海藻が繁っているので暗い内にカジカが入っていると思う。そこに振り込んでごらん。」とアドバイスをいただく。

釣り場に戻り、ゴロとバクダンの付けた仕掛けをその場所に振り込もうとしていると、ガタガタと音がする。振り向くと、岩棚に置いたはずの磯竿が海中に漂い、ウキも見えない。そして、その竿先が沖に向かってゆっくりと進んでいく。慌てて、そのゴロやバクダンを付けたままの仕掛けを、磯竿の竿先に向けて投げた。ドッポッンと派手な音を立てたが、狙いがはずれる。磯竿は一直線に沖に向かっているので微妙なコントロールが必要なのだ。しかも、投げ竿は今年使い始めたばかりのハイシートでコントロールがままならない。３度目も失敗。磯竿は益々沖に遠ざかっていく。４度目、何とかゴロも抜けてバクダンもなくなった仕掛けが磯竿の先に落ちた。そしてようやく磯竿の道糸にゴロ天秤ネット

仕掛けを絡ませることが出来たのだ。

手に持つ投げ竿に磯竿の道糸が発している魚の感触が伝わってくる。先に小さなアメマスが釣れたこともあって、感触の主は大アメマスかなとも思う。ようやく磯竿を取り込んだが、絡まった道糸とゴロ仕掛けを解いている余裕はない。今度は磯竿の方の１．５号の道糸をゆっくりと手繰り寄せる。道糸から手の平に直に大物のヒキが伝わってくる。やがて磯際に姿を見せたのはソイだった。ホッケ用にとチヌバリ４号、ハリスは１．５号におとしていたので、ハリがはずれたりハリスが切れたりしないかと心配である。岸壁に腹ばいになって手を伸ばし２ｍのハリスにようやく手が届いた。海面からの高さはおよそ２．５ｍ。腹ばいになったまま岩棚の低いところまで魚を移動させる体力も気持ちの余裕もない。早く、早くと気が急(せ)くが、実際にはソロリソロリとハリスを手繰り寄せる。奴も磯竿を長い間引っ張り続けていたことに併せて空気も吸い込んで余力をなくしていたのだろう。何とか一暴れさせないで岩棚に上げることができた。安堵のため息が漏れる。メジャーを魚に当てると４４㎝を指していた。

その上を行くクロゾイ

ソイ類ばかりの小物に混じって、大ゾイが加わり、嫁は今のところ３０㎝ほどのガヤである。しかし、ソイとガヤで２魚種となるだろうか。釣遊会規定ではアブラコとハゴトコで２魚種とはならない。ソイ類も同じなのだろうか。ソイと名の付くクロゾイやマゾイ、シマゾイではどうだろう。一括りにしてソイとなってしまうのだろうか。

そんな心配をよそに、明るくなってから、３５㎝ほどのホッケやカジカ、クロガシラが釣れた。しかし、大アブラコが出ない。用意してきたゴロ６０本、バクダン６㎏も底がついたので、ハイシートの練習も兼ねて、全ての竿に大ぶりのカツオと房掛けにしたイソメを付けて遠投する。しかし、その後、それに反応があったのはホッケだけだった。

帰りの道程が心配になり、９時には片付け始めた。佐々木氏に声を掛けたが先に行けと手を翳す。時間ぎりぎりまで粘るようだ。何度も岩の上に荷物を載せて休みながら行く途中でも吉井氏が３本の竿を出したままである。この粘りが彼らを何度も逆転優勝に導いてきたのであろう。

大平川平盤からの上がり口に手頃なコンクリートのブロックがあったのでそこに荷物を置いて、大平川出岬を展望しながら彼らを待った。佐々木氏に続いて吉井氏もやってきた。粘りを信条とする彼らだが今回は駄目だったようだ。

審査結果は

審査結果

優　　勝	谷口良幸	１２４７点	(ｸﾛｿﾞｲ４５８㎜+ｶｼﾞｶ　３７５㎜+４１４０ｇ)	新甫川
準優勝	嵐　光博	１１４５点	(ｶｼﾞｶ　３８５㎜+ｱｶﾊﾗ３６０㎜+４０００ｇ)	折　　川
３　　位	鹿島釣狂	１１２６点	(ｸﾛｿﾞｲ４２０㎜+ﾎｯｹ　３５２㎜+３５４０ｇ)	ワスリ
４　　位	西川紘一	１０８１点	(ｶｼﾞｶ　３８８㎜+ｱﾌﾞﾗｺ３７１㎜+３２２０ｇ)	狩　　場
５　　位	村岸省三	１０４１点	(ｱﾌﾞﾗｺ４６６㎜+ｶｼﾞｶ　３１５㎜+２６００ｇ)	小田西川

だった。本日のべた凪の磯模様では、釣果は少ないだろうと思っていたが、皆、なかなかの健闘ぶりだった。交綸会の村岸省三氏がアブラコ４６．５㎝を出して身長優勝、嵐会長がカジカをゴロゴロッと出して準優勝、上には上がいるのだ。そして、圧巻は谷口良幸氏である。私が自分のクロゾイに鼻をピクつかせていると、「俺のはどうだ」といわんばかりにバッカンを開けた。私のモノを遙に上回る見事なクロゾイだった。嫁のカジカも大きい。それでもって谷口良幸氏がダントツで優勝した。

帰途は、いつにも増して饒舌な谷口氏の話を子守歌にして、厚みのあるソイの刺身で一杯やっている夢を見ながらバスの人となった。

総合優勝　谷口良幸氏

「どうですか、この大ゾイ。始めはドンコかなと思って、砂浜をずりあげるとソイでした。今日は、酒を飲まずに頑張ったのがよかったのでしょう。」

本日の全釣果